



## 地域医療連携のつどいを開催いたしました ～5月28日 月曜日～

地域の医療機関の皆様方におかれましては、日頃より当院との医療連携にご協力いただきまして誠にありがとうございます。今年は春の訪れが遅く、その影響がずっと続いているような印象を持っておりましたが、5月末からは季節が確実に真夏に近づいていることを感じさせる気候になってまいりました。

そのような中、5月28日に旭川グランドホテルにおきまして、地域医療連携のつどいを開催させていただきました。この会は、地域の先生方と当院医師との顔の見える関係を深めて、より一層の医療連携を推進することを目的に2年前から開催しております。

まず前半は当院の医師3名による講演を行いました。

「血液がんはどこまで治るの？」 内科 柿木医師

「ガイドラインからみた最近の泌尿器科がん診療」 泌尿器科 金川医師

「次世代の放射線治療-オーダーメイドから緩和まで-」 放射線科 川島医師

引き続き、後半は会場を変えての情報交換会となり、旭川市医師会 山下会長に乾杯のご発声を頂戴して、会食をしながら交流を深めていただきました。

今回は、これまでで最も多い63名の地域の先生方にご参加いただきました。当院スタッフもより多くの先生方と顔を合わせ、言葉を交わすことができ、今後の医療連携の推進に向けて大きな収穫を得ることができました。

お忙しいところお時間を割いてご参加くださいました皆様方には、心からお礼を申し上げます。今後ともご支援ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



総勢132名の参加となりました。



立食で情報交換



当院の胸部外科は、昭和46年に道北で初めて、心臓血管外科手術を担当する診療科として開設されました。開設時のメンバーはチーフに北大助教授から村上忠司先生（後に第7代病院長）をお迎えし、アメリカから帰ったばかりの酒井圭輔先生（後に手稲溪仁会病院副院長）、久保田宏先生（後に名寄市立病院長、名寄市立大学学長）、それに日本の臨床工学技士の草分けの黒田廣さん（後に市立旭川病院臨床工学技士長）の4人でした。以来40年あまりにわたって地域に良質な心臓血管外科手術を提供してまいりました。これまでに手術総数は1万例、開心術は5000例を超える豊富な経験を有しています。

平成7年からは青木秀俊先生（現病院長・病院事業管理者）がチーフに就任。現在は大場淳一、宮武司、吉本公洋、安達昭、奥山淳、増田貴彦、村瀬亮太が、循環器病センター循環器内科や手術センター麻酔科との緊密な連携とご指導のもと、地域のニーズに応じた心臓血管外科手術を提供しています。また臨床工学室、手術室・ICU・病棟のスタッフやリハビリテーション部門の理学療法士、院内各部署と協力して、円滑な周術期管理を通じて患者さんの早期回復と社会復帰をお手伝いしています。

### スタッフの紹介

青木 秀俊（昭和49年北大卒）

市立旭川病院の第9代病院長であり旭川市病院事業管理者。かつては手術の名医として有名でしたが、現在は全国に知られた病院の顔として管理運営に手腕を発揮しています。

大場 淳一（昭和57年北大卒）

初代チーフの村上先生、2代目チーフの青木先生の指導を受けて胸部外科を預かっています。「365日24時間断らない胸部外科」を目指しています。

宮武 司（平成元年北大卒）

若手を指導する手腕は胸部外科随一。院内各部署との調整役としても活躍しています。成書やガイドラインに精通しており、標準的な治療はもちろん、最新の治療法もよく勉強しています。

吉本 公洋（平成4年北大卒）

ドイツ仕込みの手術の腕を持つ九州男児。風貌は豪快ですが、手術は繊細、家庭ではよきパパ、よき夫です。

安達 昭（平成6年北大卒）

丁寧な手術はいつも若手のお手本です。時間外や夜間の緊急症例も気軽に引き受けています。胸部外科では貴重な独身。いいお話をご存知でしたらご一報ください。

奥山 淳（平成7年旭川医大卒）

すでに完成された内科医でしたが、突如外科医を目指してトラバークしました。上司の厳しい指導のもと、固い決意と強い信念で粘り強く外科医への道を歩いていきます。

増田 貴彦（平成20年旭川医大卒）

学生時代に実習に訪れた胸部外科で、心臓手術の魅力に取り付かれ、そのまま市立旭川病院で2年間の初期研修を終えた後、平成22年から胸部外科後期研修医になりました。現在後期研修の最終年です。次世代のチーフ候補の筆頭です。来年は外科専門医、さらに数年後に心臓血管外科専門医取得を目指して研鑽の日々です。

村瀬 亮太（平成22年北大卒）

北海道大学循環器呼吸器外科からの出張医。2年間の初期研修を終えて4月に着任しました。怒涛のように押し寄せる大量の仕事をものともせず睡眠時間を削って奮闘しています。まずは外科専門医を取得することが目標です。



青木 医師



大場 医師



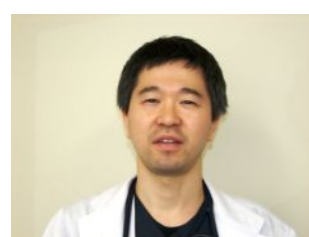
宮武 医師



吉本 医師



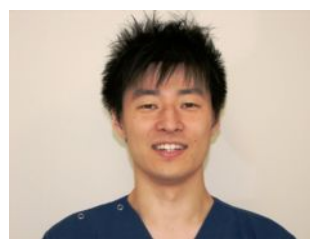
安達 医師



奥山 医師



増田 医師



村瀬 医師



文責:大場淳一



## 市立旭川病院胸部外科の使命

1. エビデンスに基づいた標準的な治療を優れた成績で提供する
2. 医学生・研修医によい研修・実習の場を提供し、次世代の医療者を育成する
3. 価値のある医学情報を発信する



## 呼吸器内科診療部長 岡本佳裕

1966年4月に天塩郡幌延町で生まれ、高校は旭川東高等学校に進学しました。当時は旭川の街も元気で買物公園は西武、AMS、長崎屋、丸井さん、マルカツ、オクノとデパートが立ち並び、そうご電器や光洋無線などの大型電気店もありました。つい先日解体された須貝ビルでは、放課後にボーリングなど友達と遊びに行ったものでした。

アサヒビルはなくなりましたが、たるまのバナナ焼きが残ったのはうれしいです。下宿生活で実家に帰るのは長期休みだけでしたが、よき友人に恵まれ充実した3年間でした。

その後北大に進学し、「大学時代は心と身体を鍛えなきゃいけない」という先輩の言葉を信じて5年の夏の東医体まで医学部バレー部の活動に明け暮れていました。当時、部に恵迪寮の人間はいなかったのですが、ことあるごとに、みんなで「都ぞ弥生」を歌っていたのが良い思い出になっています。

1991年に卒業して川上義和先生の主催する北大第一内科に入局しました。当時はナンバー内科として、広く内科一般の研修をし、その上で専門の勉強をするというのが、第一内科の方針で、毎年10名を超える研修医が入局し半年毎にいろいろな関連病院で研修させていただきました。私が研修させてもらったのは、岩見沢労災病院（現・北海道中央労災病院）で一般内科やじん肺診療、苫小牧王子病院で呼吸器疾患全般、国立療養所札幌南病院（現在は統合して北海道医療センター）で結核診療・一般内科、国立療養所北海道第一病院（廃院）で一般内科・結核、美唄労災病院（現・北海道中央労災病院脊損センター）で一般内科、天使病院では呼吸器内科で訪問診療や在宅のみとりも経験しました。今の臨床研修制度では考えられない、恵まれた時代でした。

北大に戻ってからは、気管支鏡を使った、肺癌の診断・治療のグループに属して主に検査を担当しました。基礎的な研究にはあまり興味が持てず、当時は呼吸器科専門医よりは、在宅含む地域医療をしたいと考えていたので、高血圧や糖尿病、高脂血症などの一般内科的な講演会を良く聞きに行っていました。旭川に来て11年経ち、この辺の知識はすっかり錆び付いています。

2000年に西村正治先生が第一内科の教授に就任されて、当院へ御推薦いただき、2001年4月から小笠原英紀先生の下、呼吸器科で働かせていただいています。赴任当時すでに、当院には常勤の病理医と放射線治療医がいて、肺がんの外科手術もできる施設だったので、大学時代に肺癌診療をメインにしていた私にとって、やりがいのある病院でした。しかし、残念ながら肺癌患者さんの大半は70代80代で積極的治療というよりは、緩和医療が必要な方々が多く、高齢者肺炎（誤嚥性？）の患者さんとあわせてベッドコントロールに苦勞しています。

せっかくご紹介いただいたのに入院対応できずお断りすることもあり大変申し訳ありません。また、転院の御高配をいただいている先生、在宅診療を引き受けていただいている先生には大変感謝しております。旭川厚生病院に続いて当院もがん拠点病院となりましたので、今後、さらに地域の医療機関と連携していける道を考えて行きたいと思えます。

## 編集後記

ご連絡が遅くなりましたが、4月から「地域医療連携室」の名称が「地域医療連携課」に変わっております。

E-mailアドレスも文字通り「renkei」です。連携よろしく願います。

市立旭川病院 地域医療連携課

〒070-8610

旭川市金星町1丁目1番65号

TEL(0166)24-3181(内線5370)

FAX(0166)26-0008

E-mail : renkei@city.asahikawa.hokkaido.jp